

太田次男さんは、北東北最大の和梨の産地・男鹿市五里合で「幸水」「豊水」「あきづき」「南水」「秋泉」の栽培に汗を流している。太田さんが手掛ける和梨の品質や当JAへの出荷実績などの評価は高く、令和2年度にはJA秋田なまはげ果樹部会男鹿支部から表彰状が贈られた。日頃の作業や近年の動向などを通して、梨づくりへの誠実な姿勢をうかがった。

### 他産地も参考に

### 「樹はかっこよくきれいに」

「『樹はかっこよくきれいに』がモットーです」と話す太田さん。12月から剪定作業を行い、今の時期は誘引作業で枝のバランスに気を付けている。26歳の秋に就農した太田さんは、これまでに福島県や関東圏など、多くの産地を視察。地元の園地よりも樹と樹の間が広く、枝を長く伸ばして、樹が伸びようとするとする力をなるべく阻害しない園地が印象に残った。太田さんの園地でも、主枝を長めに仕立てており、剪定や誘引の作業には特に注意を払っている。

さらに、品種の特性に沿った着果数や市場での引き合いをふまえて、「幸水」は12玉サイズ、「豊水」では14玉サイズ(※)な

ど、それぞれの品種に適した玉の大きさで収穫できるように気を遣う。「かっこよくきれいな樹を仕立てることが、収量や単価の安定につながっている。「いちばん重要な剪定や誘引のほか、授粉や摘果などといったどの作業にも『基本』があります。基本に忠実に、適期作業することが、何より大切だと感じています」と話した。

※出荷段ボール1箱に入る玉数に合った大きさ

### 波乱の近年

いまだに感染の収束が見えない新型コロナウイルス。蔓延し始めた一昨年は「『コロナ禍の影響で価格が低下する』と、農家は覚悟していました」と振り返る。加えて、晩霜害が管内を襲い、昨年は太田さんの園地で約50%が被害にあうほど甚大だった。全国的な出荷量の減少もあり、危惧していた価格の低迷は免れ、一昨年、昨年の販売単価は近年に見ない高単価で推移。「和梨が好きで食べたいと思ってくれる人が、やはりいるんだと感じる」という。

### いい和梨を作り続けたい

もうすぐ梨の花が開花期を迎え、園地が淡く色付く。「体が続くかぎりには、梨づ

くりをしていきたい。栽培するからには、いい和梨を採り続けたいですね」と、繁忙期を控えて太田さんは意気込んでいる。

太田さんは長年にわたって和梨を栽培し、男鹿の果樹産地を支えている生産者のひとりです。以前に果樹部会長なども務め、今後の産地や品種構成などをよりよいものにしようと、尽力されてきました。県外への視察研修などを通して技術を吸収しながら、基本を忘れずに日々和梨と向き合い、高品質な和梨の出荷に努めています。例年8月下旬から「幸水」が、9月下旬からは太田さんが多く手掛ける「豊水」が出荷されますので、ぜひご賞味ください。



男鹿地区営農センター  
佐々木 花萌

